

# 風信

ずっとお世話になっている記者の芦原さんに、「『風信』に書いて」と言われた。社長にでもならないと、こんな珍しい機会はあるまい。

最初は童心社の紹介をば。1957年創立で、67期目、全社28名。それと優秀な書店営業スタッフ。

社会一般的には小さな会社だと思つ。書店さんに「あ、少ないですね」と言われる。稼働点数1100点、新刊点数は年間60〜70点。

一番の作品は「いないいないばあ」

(1967年、松谷みよ子・瀬川康男)である。トーンさんの「ミリオンぶっく」でわかっただが、絵本では日本一の発行部数だ。今ちょうど、累計740



万部になる重版を発売するところ、毎年20万部刷っている。小さな会社だが、

これは自慢である。でも昨年の出生数が77万人だから、あと57万部売れてほしい。すべてのあかちゃんに届いてほしい。

他にも書名をおげたいロングセラーがたくさんあり、経営を支えられている。単年度の新刊と既刊の売上比は、2対8くらい。先生、先輩に感謝するばかりだ。それと童心社の面白ところは、なんといっても紙芝居。売上比は絵本7対紙芝居3で、今でも絵本のほうが多いが、

## 世界唯一、紙芝居ホール

後藤 修平

出自は紙芝居の直販会社なのだ。

実は紙芝居は日本にしかない、日本独自の文化財である。だけれども紙芝居を出している出版社は、当社のほか教育画

劇さんと、あと永岡書店さんが判型の小さな紙芝居をやっておられるくらい。新刊点数は、全て合わせて年間70点くらいだ。ところが、児童書は年間4300点だから、本当に小さい世界だ。

小さい世界かもしれないが、紙芝居は童心社を童心社たらしめる強い個性で

ある。作品自体はもちろん、「紙芝居はどうあるべきか」という考え方が、それを表している。だから当社では紙芝居は絶対やめない。私は出版社の命は個性だと思っている。他にないものをやりたい。見たことがないものを見てみたい。それに紙芝居はとも楽しんで、子どもはすごく好きなのだ。大人もです。むしろ自慢なのだ。童心社には「K

AMISHIBAI HAL」がある。肉声でも声が届くよう設計された天井や、照明装置など機能満載、世界で唯一の紙芝居専用ホールだ。普段は会議で使っているが、季節の節目には、近所さんと「紙芝居おなし会」をやっている。常連さんや遠くからわざわざ来てくださる方もいて、とても嬉しい。

バックヤードには、67年間で出してきた紙芝居2700点がズラリ。これが庄巻で、お客様はみな「うわー」とおっしゃる。どうぞ皆さん、「KAMISHIBAI HAL」を見に来てください。私でよろしければ紙芝居をやりますので、みればわかります！

(童心社代表取締役社長)